

マイウェイ

No.59
2006

かながわ「民話の里」物語

監修 小島瓊禮

文 小峰邦夫 写真 桜井ただひさ



財団法人はまぎん産業文化振興財団

平成18年3月発行 ● 発行人 小川是 ● 編集人 清水照雄 ● 発行 財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-225-2171 (直通) ㈱西北社 大日本印刷㈱



表紙／「月百姿」
明治23年・南足柄市郷土資料館蔵
裏表紙／佐助稲荷境内の古祠

かながわ「民話の里」物語
古くから語り継がれてきた様々な民話。五編のお話の紹介と、その舞台の地を訪ねてみました。

横浜市

よこはまの浦島太郎

昔、相模の国三浦の里に浦島大夫うらしまだゆうという人がいた。大夫は公務で任地の京都丹後たんごへ行くことになり、家族を連れて行った。大夫の屋敷は海の近くであったので、

そこで生まれた浦島太郎は、幼時から海で遊び釣りを好む美丈夫ひしやうぶとなり、里娘の憧れの的であった。

その日も、太郎は一人小舟で釣りに行

き、珍しい大亀を釣り上げた。甲羅こうらが五色のきれいな亀は、太郎の後ろでいつの間にか乙姫に変身していた。

太郎は誘われるままに姫の住む竜宮へ行き、時の経つのも忘れるほどに毎日を楽しく過ごした。

しかし、三年も過ぎる頃、父母のもとへ帰ることを乙姫に告げた。乙姫は熱心

に引き止めたが、太郎の気持ちを察して土産にと二つの品を手渡した。
「これは私が大事にしている玉手箱です。また、この観音菩薩像は、あなたのお守りとして差し上げます」

太郎はこうして丹後に戻ってきたが、あまりにも様子が変わっているのに驚いた。浜にいた老人に浦島大夫の消息を尋ねると、

「よくは知んねえが、三百年くれえ前にそんな人がいたそう。なんでも、一人息子が海に出たまま、行方知れずになっ

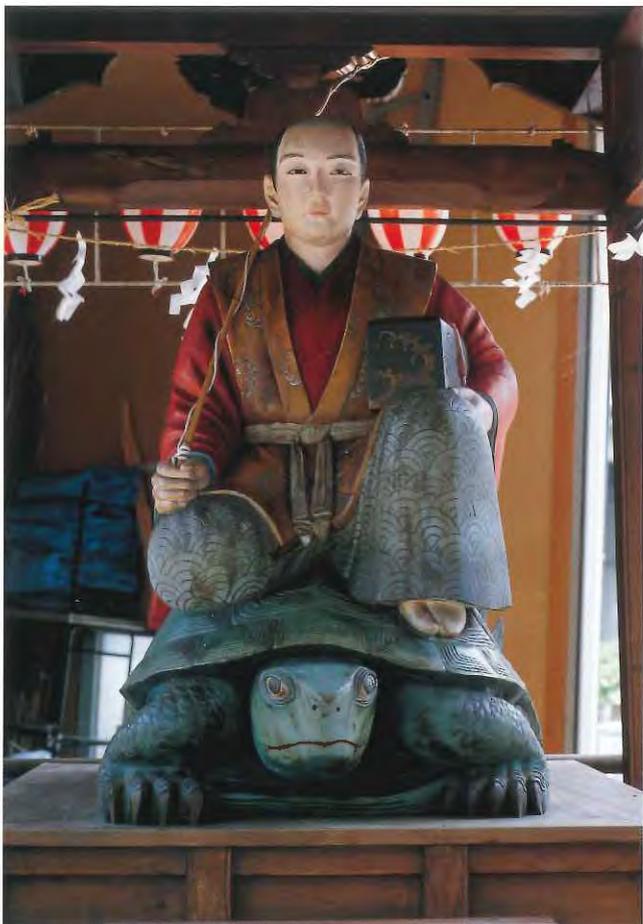
たちゆう話を聞いたことはあるがな」

太郎は、竜宮の三年がこの世では三百年にもなっていたことを悟り、親の故郷である三浦へと向かうことにした。

旅を続けてきた太郎が、背負った観音菩薩像の重さに疲れて、神奈川の丘に腰を下ろして休んだ。

すると、周りが急に暗くなり、そばに立つ老松に灯がともった。太郎は驚いて辺りを見回すと、そこには「浦島大夫夫妻の墓」と書かれた墓塔ぼとうが建っていた。

太郎は、これはきつと乙姫が教えてくれたのだと思い、ここに観音堂くわんおんどうを建立し、菩薩像と玉手箱を祀り、堂守どうもりとして一生を終えたという。



浦島太郎の木像 (写真提供：横浜市歴史博物館、浦島町内会)

佐助稲荷を建てた大根長者

昔、鎌倉に源十郎という魚屋がいた。毎日魚を籠かごに入れ、天秤棒てんびんぼうにぶら下げて売り歩いていた。

ある日、いつものように由比ヶ浜を歩いていると、狐が犬に追われて来た。どうなる事かと案じる間もなく狐は源十郎の籠の中へ飛び込んでしまった。

源十郎は吠える犬を追い払って、狐を逃してやった。

その夜、源十郎の夢に狐が現れ、「我はお前の情けで今日の災難を逃れる

ことができた。その恩返しに来たのだが、左介谷さすけだにで大根を作るとよい。そうすれば、きつと幸せになるだろう」

狐はそう告げて消えた。源十郎は半信半疑ながら、夢のお告げに従い大根作りを始めた。

その年、寒風が吹く頃になると、鎌倉中に流行病はやりやまいが蔓延し、十人のうちの八、九は命を落とすというありさまだった。人々は、どうしたものかと嘆いていると、ある男が、

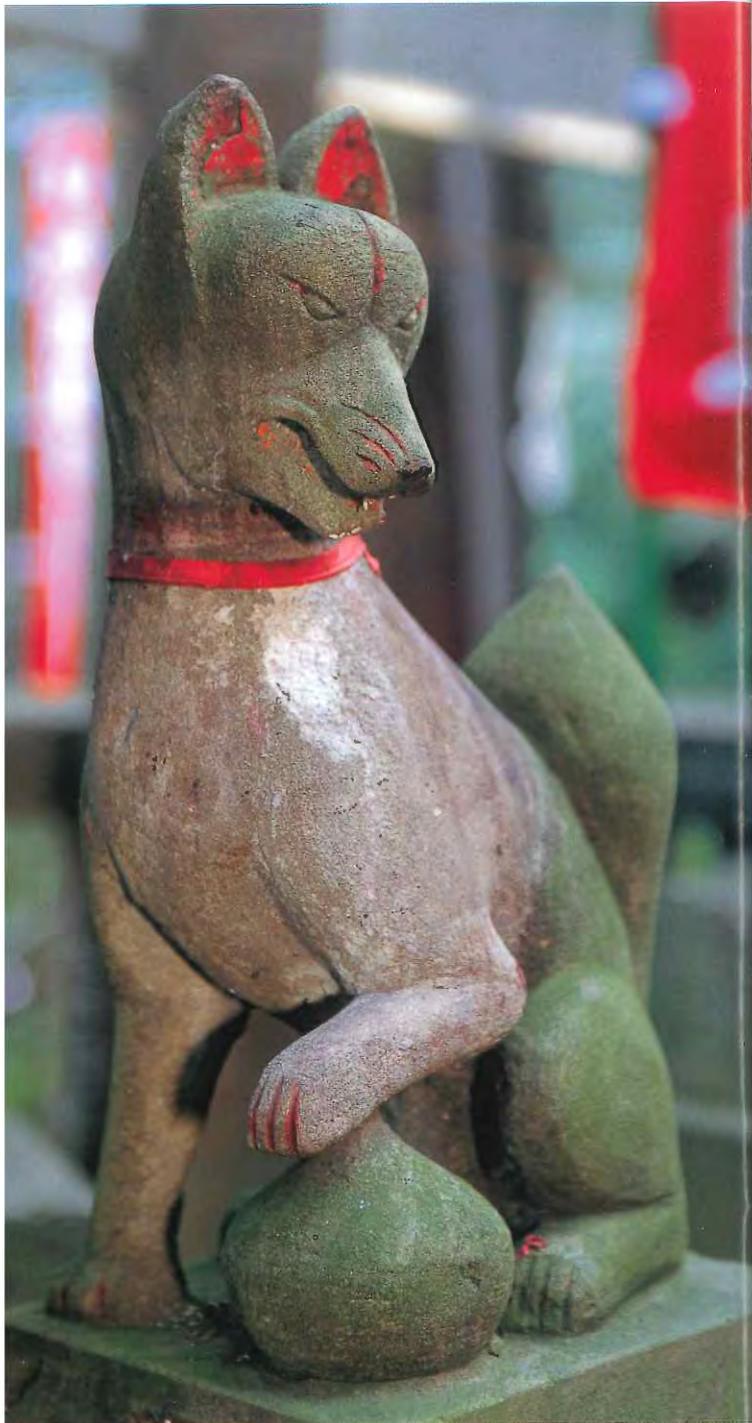
「実はな、昨夜、夢に神様のお告げがあつてな、今の流行病には、左介谷で源十郎が作った大根を食すのが一番じゃ、とこのことなのだがな」

それを聞いた者たちが、早速試してみると、話の通り病気が治った。

この噂は、またたくうちに町中に広がり、源十郎のところへ大根を買いに来る人が多くなつて、大根の値段は高くなり、源十郎はたちまち大金持ちになった。

源十郎は、このようになれたのは、すべて御狐様のおかげであると信じて、左介谷に稲荷明神の社を建てた。

今の「佐助稲荷神社」には、こうした話が語り伝えられている。



佐助稲荷境内

須賀のとんきよ話



相模川の河口にある須賀は大きな漁村で、活きのいい魚を、魚屋があちこちの村へと運んで売り歩いてきた。魚を売るには、すつとんきよのような話で客を集めるのが一番と、面白おかしい話をする商売上手がたんといた。

「そうれ、今朝あがったばかりの魚だよ。買わないと損するよ」

「本当かね。魚の目ん玉、うるんでねえか」
 「冗談言っちゃいけねえよ。ここに来る間にびんびん跳ねて籠から飛びだししゃねえかと心配したもんだ。さっきのかみさんなんか、包丁で切るうとしたら、魚が逃げちゃって、よく見たら、ながしで泳いでたってよ」

「はっはっは、話半分にしても面白いや。一

匹もらっておこうかね」

「魚屋さん、来る途中でなにか面白い事はあったかね？」

「あつた、あつた。爺さんがね、団子作るんだつて粉買ってきたんだと。そんたら、角を曲がった途端、白とブチの犬が喧嘩して飛び出してきてな、爺さんびくくらこいて、粉をぶちまけてしまったのよ。だから犬の喧嘩は、ブチ犬負けて、粉かぶった犬は白かった（勝つた）というわけさ。さあ、話を聞いたら魚を買つとくれ！買つとくれ！」

人々は「須賀のすつとんきよ」と呼び、魚売りが来るのを楽しみにしていたという。

日向薬師のやぶれ太鼓

昔、善波峠ぜんばとうげのふもとに善波という村があった。村には、それはそれは大きな楠くすのぎの巨木があった。

村を通る人たちは、

「なんと立派な楠よ。この木は神様のよ
りしろじゃ」

と言ひ、中には手を合わせる者もいた。

しかし、楠の大きく広がった枝や葉は村全部を日陰にして、作物が育つのを妨さまたげてしまふ。善波の村人にとっては、それが悩みの種だった。

そこで、村人は寄り合い相談の上、楠を伐つて、太い幹のところまで太鼓たいこを作り、

日向の薬師様へ奉納することに決めた。

作業は長時間掛かったが、村人の協力

で立派な大太鼓ができ、早速、薬師様のお堂に奉納された。

そのうちに、人々から、あんな見事な太鼓を、ただ飾っておくだけではもったいない、打ち鳴らして刻ときを告げることにしようという声が出た。

それは、名案だということで、朝、ド

ーン、ドーンと鳴ると、村人は野良へ向かい、夕方、日が沈むドーン、ドーンで仕事をやめ、家に帰るようになった。

ところが、この太鼓の音は、村人が思

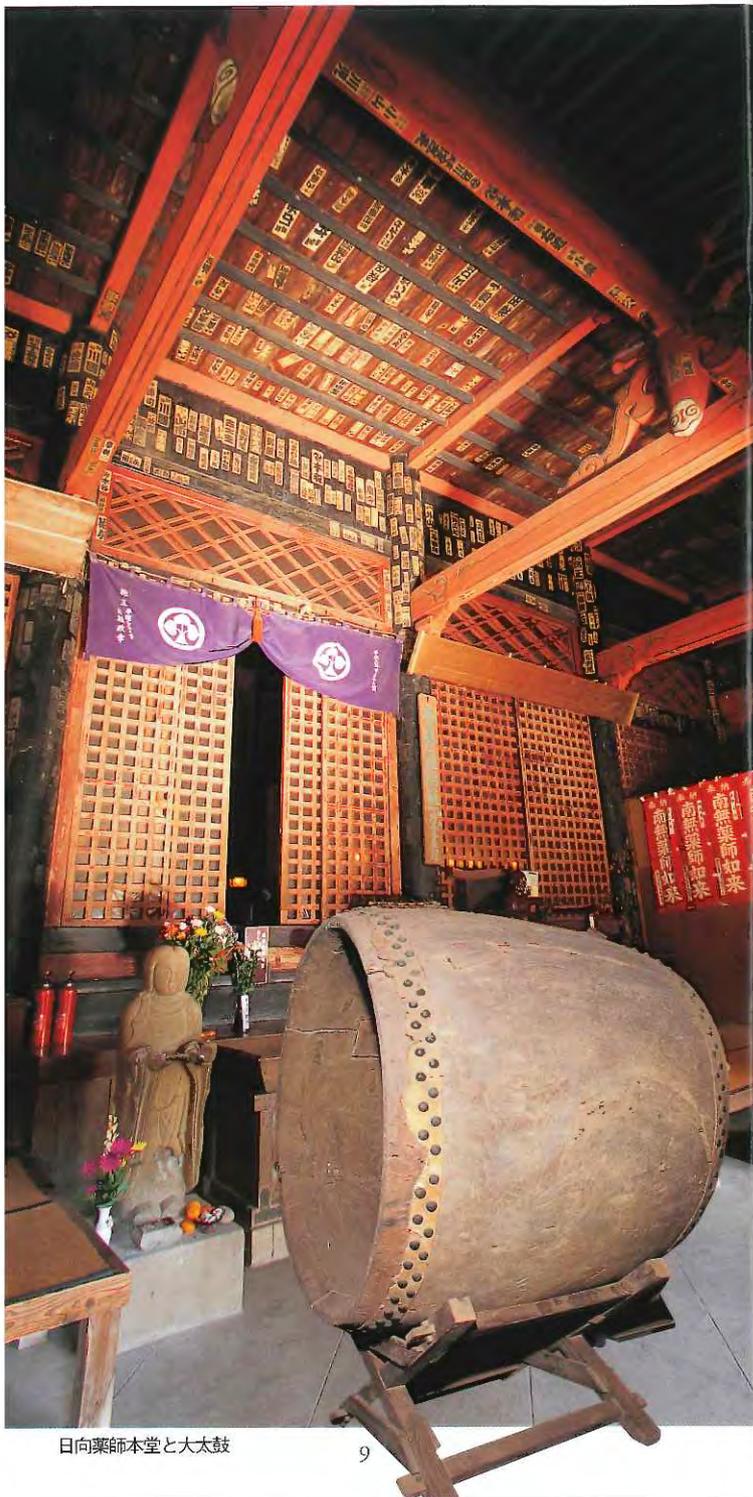
った以上に遠くまで響いていた。ドーンという音が、相模川の水を伝わって海にまで届いたので、驚いた魚が沖へ沖へと逃げてしまった。

それで困ったのが、須賀の漁師たち。

「このごろ、どうも魚が獲れねえのは、

朝夕響いてくるでつけえ音のせいだべ」

漁師たちは音のする方へと向かい、太鼓を見つけると、それとばかりに太鼓の皮を破いてしまった。それ以来、日向薬師の太鼓は音無しになったという。



日向薬師本堂と大太鼓

金太郎

千年ほど昔のこと。相模と駿河の国境、足柄峠に山姥が住んでいた。山姥は子どもを授かるよう願を掛けているとある晩、山の頂で真つ赤な龍と夫婦になる夢を見た。その時、稲妻が光り雷鳴が轟いて、山姥に一子が宿った。

こうして生まれたのが金太郎である。山で育った金太郎には、人間の友達はいなかったが、山中の草原には、猿、鹿、兎、さらに熊までもが遊び仲間として集まり、飽きることがなかった。

動物たちを相手にして大きくなった金太郎だから、力は強い、足は速いというありさまで、峠を通る人たちから足柄峠に怪童ありとの噂が広がった。

ある年のこと、源頼光という武士が朝廷のお召しを受け、多くの家来を引き連れ京の都へ向かうため、足柄峠を通りかかった。そこへ出てきたのが、熊に跨り、猪、猿、山犬などを従えた金太郎だった。「こいつが噂の怪童か、これだけのけだものを連れて歩くとは大した若者よ。ど

うだ、わしの家来にならないか」頼光の誘いに金太郎は承諾し、名を坂田公時と改め、頼光に従った。

当時、都では、大江山の酒吞童子という悪者の集団が、若い娘たちをさらっていくという悪事を繰り返していた。

帝は、これを憂いて、ちようど都に着いた源頼光に酒吞童子退治を命じた。

頼光が、公時以下五人の家来を連れて大江山へ行くと、悪者どもは酒盛りの最中だったので、よしつとばかりに飛び込んで、酒吞童子と手下を討ち取り、娘たちを救い出した。

坂田公時は、頼光の四天王の一人として、その名を後世に語り伝えられた。



清長画

鳥居清長 金太郎の男年弾く小鬼
(南足柄市郷土資料館蔵)

【よこはまの浦島太郎】

浦島太郎の話は、古くから有名で「日本書紀」や「万葉集」にも記されています。伝承地は全国的にあり、また、似たような話は太平洋の諸島にもあります。子供にいじめられている亀を助けて、乙姫に会うというのが一般的ですが、この筋立ては近世に入ってからのもので、「日本書紀」では、太郎が大亀を釣ると、それがたちまち女となり、太郎は感激して妻としたとあります。わが国最初の恋愛譚とも言われています。

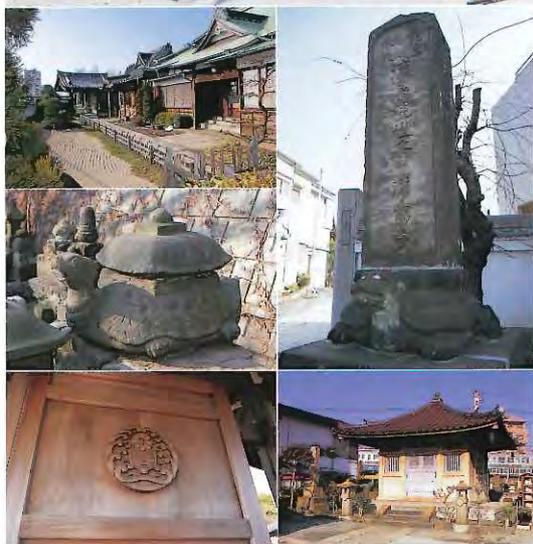
現在の神奈川県浦島ヶ丘周辺に、かつて浦島寺（観福寿寺）があり、太郎が童宮から持ち帰ったといわれる観音像が祀られています。

江戸時代には東海道の名所の一つだったようで、様々な図会に登場します。また、当時の略縁起からは、より古い時代から浦島観音があったことが伺えます。

観福寿寺は明治元年に焼失し、廃寺に。その後、類焼を免れた観音像や石碑などを引き取った慶運寺が、通称「浦島寺」と呼ばれるようになりました。周辺には、観福寿寺の跡地近くに建つ蓮法寺や、「浦島町」「亀住町」などの地名、「涙石」「浦島地蔵」「足洗いの井戸」など、ゆかりの事物が多くあります。



上ノ浦島町にある「浦島太郎山車」。ユニークな像は昭和7年に造られたもの。毎年8月中旬の祭礼時に町内を巡る（写真提供：横浜市歴史博物館、浦島町内会）。右ノ慶運寺境内にある浦島寺碑。左ノページの図に見えるものと同様の形をしている。下右ノ浦島観音を祀る観音堂。観音は12年ごとに開帳され、次回は平成20年の予定。中左・上ノ国道1号の坂の上にある蓮法寺。昭和初年に浦島寺復興を願う子安の漁師たちによって奉納された浦島観世音がある。中左・下ノ蓮法寺境内にある浦島太郎の供養塔（亀齢塔）。下左ノ蓮法寺の山門には亀と波を象った意匠が。左ノページノ東海道を所之内、神奈川浦島古跡（横浜市歴史博物館蔵）。



【佐助稲荷を建てた大根長者】

佐助稲荷の縁起としては、大根長者よりも源頼朝（よりのちか）にまつわるお話が、よく知られています。「伊豆の配所にあつた頼朝の夢に、鎌倉の稲荷の神と称する老翁があらわれ、平氏討伐の挙兵をするよう告げた。それに従つた頼朝は、源平合戦で勝利を得たので、隠れ里の稲荷社を再興した」というもの。元鎌倉市図書館長の澤寿郎氏の稿によれば「前右兵衛佐殿（さのえ）」で、佐殿と呼ばれた頼朝を助けたので「佐助稲荷」といわれる、とあります。稲荷上社の裏手上にある窟内の稲荷などは、鎌倉開府以前の姿を想像させます。



上ノ本堂。下ノ古い信仰の姿を思わせる岩屋が。

【須賀のとんきよ話】

相模川河口、平塚の須賀漁港を囲む崖壁を回ると、川べりの小公園に「相州須賀湊の碑」が建っています。漁港に接する魚市場の前には、ここが商人が歩き始める起点だったと示した「札の辻」旧跡があります。はやくから漁場として開けたこの地は、魚類以外にも、木材や穀物など、物資を各地に輸送する拠点だったという記録が残されています。江戸時代には、「樺手振り（ボテイ）」と呼ばれる魚売りや、商人たちが活躍し、その奇知と勤勉で、広く江戸にまで知られていました。ユニークなとんきよ話は、彼らが歩いた厚木市や愛川町、松田町などでも伝わっています。



上／現在の須賀港には釣り船が並んでいる。
下／札の辻の石碑。



【日向薬師のやぶれ太鼓】

伊勢原の日向薬師といえは、本尊の薬師如来像は、名僧行基の鈍彫り薬師として伝えられ、新潟県の米山薬師、高知県の柴折薬師とともに、三薬師の一つに数えられています。太鼓は、本堂の奥に置かれているもの。「吾妻鏡」建久四年（一一九三）五月の条にある、源頼朝が富士の裾野で盛大な巻狩りを催した際に打ち鳴らされ、その後、奉納されたとの伝があります。直径一尺三八、長さ一尺三〇もあり、大きさは県下で最大級。内側に張り替えの記録が書かれ、天文九年（一五四〇）の記録が一番古く、一番最近のものは宝暦四年（一七五四）となっています。



上／大太鼓。通常は非公開。下／参道はうっそうとした緑が覆う。



【金太郎】

足柄山の金太郎の伝説は、南足柄市をはじめ、箱根町・開成町などで伝わり、内容も少しずつ違っています。南足柄市では、古くから四方長者の伝説があり、八重桐という長者の娘が生んだ子どもが金太郎であるというお話になっています。地藏堂には山姥の像が置かれ、付近には「夕日の滝」や、「金太郎生家跡（長者屋敷跡）」「金太郎の遊び石」などがあります。峠をはさんだ箱根町・仙石原方面には公時神社があり、そこから金時山への登山道の途中に「金太郎の宿り石」「手まり石」などの巨石がたち並んでいます。面白いのは箱根町の姥子温泉のお話。「金太郎が山で遊んでいると、誤って枯れ枝で眼を刺してしまっただけで、直らずに困っていたが、山姥が神様のおおげを受け温泉を発見し、ここで目を洗ったところ、すぐに直った」と伝わり、これが当地の由来となっています。



右上／落差23mの夕日の滝。金太郎が産湯をつかったと言われる。右下／金太郎生家跡地。金太郎の遊び石の公園などが近くにある。左上／公時神社と、境内にあるまさかりのモニュメント。左下／金太郎の宿り石。かつて、この岩の下の洞窟に金太郎と山姥が住んでいたといういわれがある。昭和6年に突如割れて現在ようになった。下方に小さく写るのは、登山者が置いていく杖代わりの木の枝。



土のにおいの魅力

琉球大学名誉教授 小島 櫻禮

昔から日本の村では、暮らしに必要な知識は、家族や周囲の人から直接に学ぶものでした。現代なら「文学」とでもいいような様々な物語も、口語りを耳から聞きました。文字によらない村人の物語

という意味で「民話」と呼ばれています。「民話」には古くは神社に祀^{まつ}られているような神々の物語もありました。神々が世の中をどのように創ったかを語る「神話」です。八世紀初めの書物、「古事記」

「日本書紀」「風土記」には、「神話」が豊富に記録されています。その名残は、現代まで「伝説」として伝わっているところがあります。金太郎もその一例かもしれません。

「民話」を代表するのは、その土地に結びついた物語「伝説」です。歴史上の人物や身近な先祖が主人公です。山や川、泉や樹木や石、あるいは橋や石像や塚などの由来談として語られるほか、村の旧

家や神社、寺院を舞台にしていることもあります。浦島太郎、佐助稲荷、日向薬師の伝説はこの例です。村人にとっては、歴史ですが、多くは人々の夢で彩られています。

また、桃太郎などのようにまったく空想の物語もあります。「昔々、あるところ」と語り始めるので、「昔話」と言います。時間も場所も特定しない、抽象的な人生を語ります。ただ本来は、目の前の事実になぞらえて語るものであったらしく、「伝説」のように語られることもあります。須賀のとんきよ話や、とんちの久助はその例です。

「民話」は、村人の記憶を通して語り継がれてきました。ですから、人々の思いが豊かに反映しています。村人が語る「民話」の魅力は、自然の中で生きてきた、人々の暮らしの生命力の魅力です。「民話」の土のにおいは、そこから生まれます。

かながわの民話マップ

(県内の主なものを掲載)



- 1 せなかの赤いカニ (川崎市) 2 おこんぶ (横浜市港北区)
- 3 鼻取地蔵 (川崎市) 4 浦島太郎 (横浜市神奈川区) 5 黒猫ときゅうり (横須賀市)
- 6 夫婦岩 (三浦市、横須賀市) 7 八本目の蛸の脚 (葉山町、三浦市)
- 8 お夏ぎつねと孫三郎ぎつね (逗子市) 9 佐助稲荷を建てた大根長者 (鎌倉市)
- 10 建長寺の狸門 (鎌倉市) 11 猫の踊り場 (横浜市戸塚区) 12 天女と五頭龍 (藤沢市)
- 13 でいらぼっち (相模原市) 14 姥山 (大和市) 15 小桜姫と小柳姫 (座間市)
- 16 おいてけ堀 (綾瀬市) 17 すずめの唐櫃 (海老名市) 18 かっぱどっくり (茅ヶ崎市)
- 19 須賀のとんきよ話 (平塚市) 20 善正坊の一しよい門 (愛川町)
- 21 とんちの久助 (厚木市) 22 日向薬師のやぶれ太鼓 (伊勢原市) 23 虎御石 (大磯町)
- 24 泣ヶ原の地蔵 (大磯町、二宮町) 25 狼の恩返し (藤野町) 26 天狗沢 (津久井町)
- 27 鶴の育て子 (秦野市) 28 天狗の神隠し (大井町) 29 犬越路 (山北町)
- 30 山姥の糸車 (山北町) 31 竜宮女房 (小田原市) 32 金太郎 (南足柄市、箱根町)
- 33 乙女峠 (箱根町) 34 芦ノ湖の九頭竜 (箱根町) 35 ぼんぼん鮫 (真鶴町)

市区町表示は平成18年2月末日現在

かながわ「民話の里」ブックガイド

『まはまの浦島太郎』(特別展資料)横浜歴史博物館
 『よはまのつしまなう』(絵本)横浜歴史博物館
 『金太郎伝説』謎ときと全国の伝承ガイド
 金太郎・山姥伝説調査グループ編/夢工房
 『かながわの伝説散歩』萩坂昇著/睦印書館
 『神奈川県の民話』日本児童文学者協会編/備後社
 『かながわのむかしばなし』(絶版)
 神奈川県教育庁文化財保護課編/神奈川合同出版

上/左利き専用グッズのコーナーで急須を手にする浦上さん。日本で唯一という左利き商品のオンラインショップを運営中。中・上/左利き用商品の一部。中・下右/専務で父親の浦上裕史さんと。「我社は環境保全を基本理念にしています」と語る。中・下左/清潔で明るい店内。下/取材で訪れたフランクフルトの文房具店で。



海外派遣団員が語る 36
伝統的なビジネスの原点に接し、
おおいに刺激を受け、
視野を広げることができました。
相模原市相模原 菊屋浦上商事(株) 浦上裕生さん



最初は軽い気持ちで応募して…

平成十六年に、(助)はまぎん産業文化振興財団主催の商業従業者海外派遣団に参加して、パリ、コブレンツ、フランクフルトの専門店を視察してきました。正直言って、当初はあまり気乗りがしませんでした。

私は、祖父の代から続く文房具店に勤めています。今更ヨーロッパの文房具店を視察して、いったい得られるものがあるだろうか、世界の文具市場については自分なりに学習しています。だから、たかを括っていたんですね。

しかし、相模原市商店会連合会の勤めもあるし、まあ、軽い気持ちで応募してみようかなと。レポートを提出して、面接を受けて、幸い参加することが適い、実際に行ってみると、もう、いろいろな意味で、いい勉強をさせていただきました。

丁寧な接客と確かな顧客管理

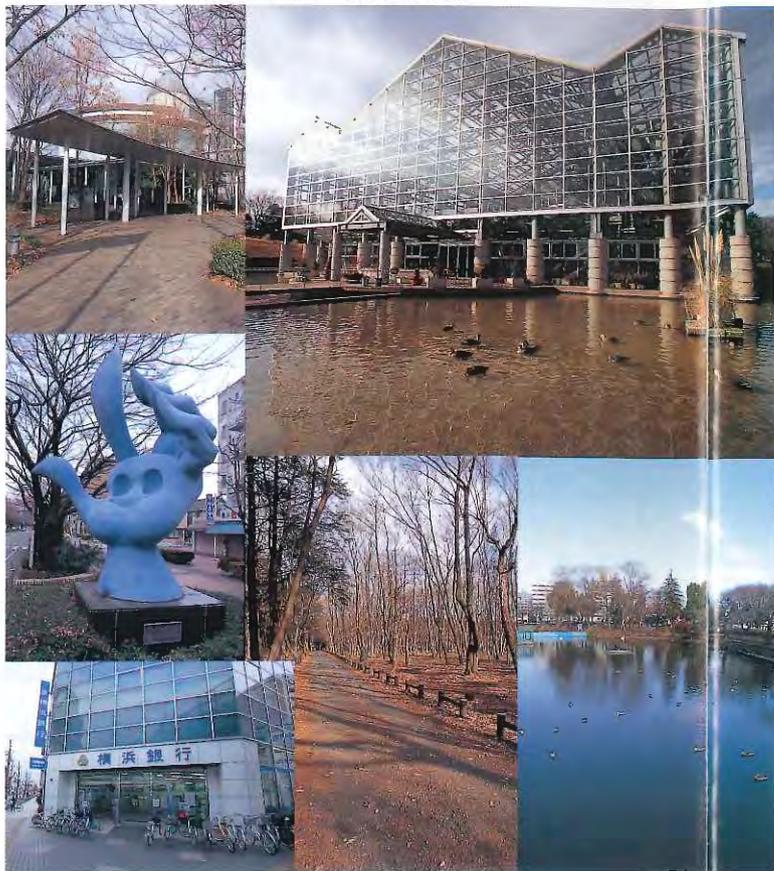
今回の視察で、私が担当したのはフランクフルトの中心部にある文房具店です。従業員が二十九人もいる、うちとは比べようもない大きなお洒落な店でした。ちょうどクリスマスシーズン

ということもあって、店内はお客様でごったがえしていました。とはいえ、従業員の接客はものすごく丁寧で、ゆったりしている。

たとえば、万年筆売り場では、お客様の字のクセや筆圧をみて選んでくれる万年筆のプロがいて、あれやこれやとアドバイスをしている。お客様も納得のいくまで質問をしている。まるで会話を楽しんでいるようにさえ見えまして。日本だったら、「おい！早くしてくれ」っていうところでしょうけどね(笑い)。

オーナーの方の話では、この店では

上右／県立相模原公園にある県内最大級という温室。上左／相模原の歴史・文化を紹介する相模原市立博物館。下右／「でいらぼっち」という巨人伝説が伝わる鹿沼公園。下中／相模原中央緑地の「木もれびの森」。左中／岡本太郎の「呼ぶ青い手」。道路を隔てて「赤い手」が建つ。下左／横浜銀行相模原駅前支店。



店頭での売上が全体の九五パーセントで、残りはカタログ通販による注文とこのことでしたが、これにはびっくりしましたね。というのは、現在日本の主流は通信販売です。インターネットによるオンラインショッピングも普及しています。いまや文房具は店頭で買うものではなくなりつつあります。うちの店などは、店頭販売は全体の五パーセントくらいのものです。

さらに、商品管理にしても、機械管理ではなくて、それぞれの担当者が在庫管理を行い、見込み発注をしているという。なんと見込み発注の的中率が九〇パーセントとのことでした。それだけ社員のスキルが高い。それぞれの担当者がきちんと顧客管理をしているんですね。それが接客にも現れているんでしょね。

ものを大切にする姿勢に感動！

人々の、ものを大切にするという姿勢には感動しました。

この経験を、直接、現在の仕事に生かすことはできませんが、これから仕事を広げていく上で、必ず役にたつと思っています。まだまだ自分はいいんだなあ、つくづく感じましたね。

また、他の業種の専門店を訪ねたことも、たいへんいい勉強になった。一緒にいった仲間たちは皆それぞれ、その業種のプロですから、取材をみているだけでもタメになりました。できればもう一度、いや、二度でも三度でも行きたいですね(笑)。(談)



浦上裕生(うらかみ・ひろお) ● 昭和50年生まれ。大学卒業後、流通およびIT関連の仕事を経て、菊屋浦上商事株に入社。アイデアに富んだ営業に取り組み。

※ 助はまきん産業文化振興財団では、事業の一つの柱として、平成元年より神奈川県内の商業従業者の方を対象に「神奈川県商業従業者海外派遣事業」を主催。海外の商業文化を視察する機会を提供しております。

お知らせ

へまぎんホール ヴィアマールからのお知らせ
春の文化講演会のご案内

へまぎん産業文化振興財団では、神奈川県近代文学館との共催により、永六輔さんをお迎えして、春の文化講演会を誰かとどこかで開催いたします。どうぞ皆様お誘い合わせのうえ、へまぎんホール ヴィアマールへお出かけください。

日時●平成18年4月29日(土) 開演15:30(開場15:00)

会場●へまぎんホール ヴィアマール(横浜銀行本店ビル1階)

主催●(財)へまぎん産業文化振興財団

神奈川近代文学館 (財)神奈川文学振興会

入場料●一般1,200円(神奈川県文学館友の会

会員は1,000円)全席自由(消費税込み)

※未就学児童の入場はご遠慮ください。

チケット取扱い・プレイガイド

●へまぎんホール ヴィアマール

●神奈川近代文学館

●横浜高島屋6階チケットショップ

●相鉄観光プレイガイドジョイナス1階

●ローソンチケット(レコード36517)

☎045(225)2173
☎045(622)6666
☎045(311)5111
☎045(319)2456
☎0570(000)777



©稲村不二雄 永六輔氏

●お問い合わせ：へまぎんホール ヴィアマール(横浜銀行本店ビル1階)

横浜市西区みなとみらい3-1-1

電話●045(225)2173

交通●JR・横浜市営地下鉄線 桜木町駅下車、動く歩道利用5分/みなとみらい線 みなとみらい駅下車、クイーンズスクエア・ランドマークプラザを通り抜け徒歩7分(駐車場のご用意はありません)

<http://www.yokohama-viamare.or.jp/>

※「マイウェイ」へのご意見・ご要望は
info@yokohama-viamare.or.jp
までお気軽にお寄せください。

年金

へまぎんからのお知らせ

「年金」電話相談サービス
(無料)のご案内

年金制度や年金請求の手続き方法など、年金に関する疑問に

何でもお答えいたします。

また、年金に関連した雇用保険制度、健康保険制度についてのご相談や

「年金教室」のお申し込みも承ります。お気軽にお電話ください。

●へまぎん年金デスク

フリーダイヤル ミニヨロバンク
0120(334)089

●相談受付日 銀行窓口営業日

●相談受付時間 9時～17時

編集後記

「桃太郎」や「猿蟹合戦」をはじめ、子供の頃には、誰もが民話に親しみ、幼心に胸躍らせた経験をお持ちのことでしょう。「かながわ」には、各地に古くから語り継がれてきた数多くの民話があります。

今回の「マイウェイ」は、五つの民話を取り上げ、そのお話を掲載するとともに、民話の舞台の地を、紹介する「かながわ「民話の里」物語」を刊行いたしました。恩義、正義、弱者へのいたわり、ユーモア精神等その含蓄のある内容は、歳月を経た現在でも、私たちの暮らしの中で、ごく当たり前にも求められているものであり、その意義は、いささかも薄れておりません。

また、その舞台の地をたずねてみますと、たとえ架空の話であっても、あたかも史実として、その地に存在している感

を覚ええました。これは、取りも直さず、民話その地に文化としてしっかりと根付き、誰からも愛されている証に違いありません。合わせまして、県内各地の民話マップも掲載をしております。

この小冊子が、ご家族での、また友人仲間との、散策を兼ねた民話の里巡りを楽しむ機会となり得ますならば、幸いです。ございます。

最後になりましたが、監修をお引き受けいただきました小島環禮氏をはじめ、取材にご協力いただいた関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

財団法人へまぎん産業文化振興財団
事務局長 清水照雄

●次号予告(2006年6月下旬刊行)
かながわ「島」物語(仮)